【世界史Ａ・３学年】

単　　元（教　　材）名
現行課程（世界史Ａ）：世界市場の形成と日本 新課程（歴史総合）：結びつく世界と日本の開国

【この単元のねらい・目標】
　日本を含む世界の国々や地域の動向に着目し、史資料の読み取りや解釈を通じて世界市場の形成がもたらした国際社会の変容、自国の社会の変容等について理解させる。さらに、当時の状況を学ぶことから現代的な諸課題との共通点を見出し、現代的な諸課題の改善や解決に向けて多面的・多角的な視点を持って考察・判断・表現する力を育成する。

【本時のねらい・目標】
　資料を活用し、産業革命後のイギリス・インド・中国の関係を読み取った上で、産業革命が及ぼした影響を考察し、表現する。そして、これまでの学習内容をふまえ、開国後の日本がどうしていくべきかを考察する。

【この教材で特に意識する「科学的思考力(SW-ing SLC)」】

項　　目	内　　容
Ｄ情報分析力 Ｅ考察・統合力	ｉ：必要な情報を取捨選択し，整理，原因等の分析ができる。 ｉ：これまでの経験や学習によって得た知識や情報を統合して推測したり，課題について自分の意見や考察を論理的に組み立てたりすることができる。

【教材開発において特に意識したこと・工夫】
・資料を活用し，グラフや史料から読み取る能力を育成することを意識した。
・ホワイトボードを活用し，項目ごとに使うペンの色分けをすることで，意見の比較がしやすいようにした。

【全体の指導計画（全８時間)】
第１時　鎖国中の日本と外国の交流（四つの窓)「鎖国中の日本は外国とどう交流していたのか」
第２時　１８世紀までの蘭学の発達「発達した蘭学を為政者はどう扱ったか」
第３時　文化の伝播「美術作品は世界にどんな影響を与えたのか」
第４時　産業革命の影響
　　「産業革命は中国・インド・日本にどのような影響を与えたのだろう」・・・【本時】
第５時　日本の産業革命「日本と世界はどうつながっていくべきだろう」

【第４時の授業展開】

時間	内　　容
導入 ４分	前時の学習の振り返り，本時の目標，活動の確認
展開① １０分	産業革命後のイギリスの貿易品のグラフとイギリス綿布とインド綿布のグラフから，産業革命後によるイギリスとインドの変化を個人で読み取り，数名発表する。 →　産業革命により，イギリスは原綿を輸入し，綿織物に加工して輸出するようになった。そのため，イギリスとインドの綿布輸出量は逆転し，インドは綿布の輸出国から輸入国になったことを読み取る。
展開② ５分	イギリスと中国の関係を表した資料とアヘン密輸量のグラフから，インド産アヘンを密輸した理由を個人で読み取り，数名発表する。 →　イギリスは一方的に代価を払うだけだったことを嫌がり，アヘンの代価として中国から銀を支払わせることで三角貿易を完成させたことを読み取る。

展開③ １５分	イギリスとインド・中国，それぞれの立場で産業革命の影響を，いい影響・悪い影響・判断できないという３つの視点から個人で考察し，２～３人のペアで話し合い，全体で共有する。 →　ホワイトボードを使って各ペアの意見を発表する。記入の際は，いい影響は青・悪い影響は赤・判断できないは黒，と使用するペンの色をわける。
展開④ ８分	開国後の日本の貿易の様子や，イギリスの対日観の史料をふまえ，開国後の日本がどうすればよいかを個人で考え，数名発表する。
まとめ ３分	今日の授業について振り返り，自己評価を行う。

【使用プリント等】
・ワークシート（授業者作成）
・インド・中国・イギリス・日本の貿易に関する資料を集めたプリント（授業者作成）
・電子黒板に投影するスライド

【評価について】
評価Ａ：イギリス・インド・中国の立場ごとに産業革命が及ぼした影響を考察し，表現した上で，開国後の日本がどうしていくべきかを，学習内容をふまえて考察できる。
評価Ｂ：イギリス・インド・中国の立場ごとに産業革命が及ぼした影響を考察し，表現できる。
評価Ｃ：イギリス・インド・中国の立場ごとに産業革命が及ぼした影響についての考察が不十分である。

評価Ｃの生徒に対する手立て
　三角貿易によって，インド・中国がイギリスの原料供給地であり，製品市場になったことに着目させ,貿易において経済的にイギリス優位でインド・中国が厳しい立場であったことを理解させる。